

# 幼児の身体的攻撃的行動に影響を及ぼす要因について

——敵意帰属、衝動統制、怒り——

小 國 友花子

## 問 題

仲間から拒否される子どもの特徴として、攻撃的・破壊的行動の多さが言われている。仲間からの受け入れを難しくすると考えられる攻撃的・破壊的行動が、どのように引き起こされるのかというメカニズムを解明するための研究が数多くなされてきた。

その中でも Dodge (1980) は、外的刺激を受け取り、それに対して何らかの行動がとられるまでの過程を6つのステップに分けた、社会的情報処理モデルを考えた。このモデルの第2ステップである解釈の研究から、攻撃児は非攻撃児よりも、自分が何らかの被害を受け、加害者の意図を示す手がかりが与えられていなかったり、手がかりが多義的でどうとでも解釈できるような場面に置かれたりした時に、加害者は自分に敵意を持っていると解釈しやすいことが見出されてきた (Dodge, 1980; 片岡, 1997; Quiggel, Garber, Panak & Dodge, 1992; Schwartz, Dodge, Coie & Hubbard, 1998)。

Dodge らは研究を重ねる中で、人間の攻撃には、反応的攻撃 (reactive aggression) と道具的攻撃 (instrumental aggression) という2つのタイプがあると考えた。前者は、衝動的・情動的な攻撃であり、欲求不満、目標追求の阻止、迫りくる脅威などの刺激に対し、否定的感情 (怒りなど) を表出しながら危害を加えて、自分を守る攻撃で、後者は、統制的攻撃であり、外的な報酬を得るためや、何らかの負の事態を取り除くための手段として行われる攻撃と定義した (Dodge & Somberg, 1987)。社会情報処理モデルにおけるこの2種類の攻撃の研究から、反応的攻撃の多い子どもは、道具的攻撃の多い子どもよりも、加害者は自分に敵意を持っていると解釈しやすいことが示されている (Dodge & Coie, 1987; Crick & Dodge, 1996; Marcus & Kraimer; 2001)。

しかし、反応的攻撃は衝動的・情動的であることから、十分な解釈を行う前に、否定的感情を統制することなく行動を起こしている可能性も考えられる。例えば、Waldman (1996) は、攻撃児は非攻撃児と比較すると、解釈する時間の短いことを示し、Gilliom, Shaw, Beck, Schonberg & Lukon (2002) は、幼児期で怒りの統制の低かった子どもは高かった子どもよりも、学童期での攻撃的行動や怠慢行動の多いことを示し、Eisenberg, N., Fabes, R. A., Murphy, B., Maszk, P., Smith, M. & Karbon, M (1995) は、幼児期で情動性が強く自動的反応が多かった子どもはそうでなかった子どもよりも、学童期で攻撃的・破壊的行動が多いことを示している。行動を抑制するシステム (inhibitory system) は気質の1つであり、3~6歳に発達し、認知能力、知能、注意、記憶の一因となる。抑制システムの中でも、認知的に存在する目標を求めている間に、関係ない刺激に対する反応を抑制するシステムに障害があると、刺激と反応の間に「間」(遅延時間) を入れられない、つまり、考えてから行動することができないと考えられている (Carlson & Moses, 2001; Kochanska, Murray, Jacpues, Koenig & Vandegeest, 1996)。例えば、Ayduk, Mendiza, Michel, Downey, Peake & Rodriguez (2000) は、延期されている時に、衝動的な反応を押さえたり、調整したり、遅らせたりする能力を査定する課題 (報酬遅延課題: delay gratification task) を用いて、この課題成績が低いことと、学童期以降の不適応や攻撃性の高さに相関が見られることを示し、解釈する前に行動を起こしている可能性を示唆した。

以上より、行動を抑制するシステムが発達する時期である幼児期での攻撃的行動は、Dodge らの社会的情報処理モデルだけでは、解明することができないことが考えられる。つまり、衝動統制、怒りの統制の低さによって、解釈を行う前に攻撃的行動を起こしている可能性が考えられる。また、先行研究では、対象児を攻撃児と非攻撃児に分け、2群での解釈や衝動性の違

いを比較検討しているが、群分けの難しさが指摘されている。そこで、本研究では群分けを行わず、敵意帰属、衝動統制、怒りの3つの要因が攻撃的行動に及ぼす影響について検討する。

## 目 的

Dodge の情報処理モデルの研究から敵意帰属、情報処理モデルに存在しない要因として、衝動統制、怒りを挙げ、これら3要因がどのように攻撃的行動に影響を及ぼしているのかについて考察することを目的とした。本研究では、より自然な攻撃的行動について検討する必要性を考え、保育園でのフィールド観察を行う。また、発達差を考慮し、各児に対し発達検査を実施する。

## 方 法

### 研究対象児

3つの保育園の年長児 81 名 男児 42 名 (5:3~6:8; M=5:11) 女児 39 名 (5:3~6:8; M=6:0)

### 身体的攻撃的行動についての観察

各保育園とも観察・調査期間は2ヶ月、観察日数はのべ30日間で、観察時間は9時から13時までだった。

観察者は、子ども達の行動に影響を与えないよう配慮しながら活動に参加し、攻撃的行動が発生した後に、発生時間、攻撃児、被攻撃児、攻撃児の行動、行動の原因、被攻撃児の対応についてメモをとった。

### 敵意帰属と衝動統制についての実験

#### 刺激

紙芝居 (3場面・四つ切サイズ・カラー)

紙芝居の主人公は、被調査児の性と一致させた。

Dodge らが過去に使用した対人葛藤場面のストーリーのうち、相手の意図があいまいであるものを参考にし、また観察によって対人葛藤が生じやすい場面をいくつか挙げて作成した。(付表1, 付録1)

円形カード (直径9cm・6cm・3cmの3段階)

玩具 (笛吹き風車, 空気鉄砲, けん玉)

#### 実施状況

調査者は被調査児を教室から個室へ一人ずつ連れて来て、机をはさみ90度の位置で座った。

所要時間は約15分だった。

#### 手続き

「今日は、おねえちゃんが紙芝居を作ってきたから見てね。紙芝居が終わったら、聞きたいことがあるから、〇〇ちゃん (被験児名) が思ったことを教えてね。」と教示した。(場面はランダムな順で呈示した。) 各紙芝居を読んだ後、以下の質問を行った。

質問1: どうして、この子はここに座っていた (この子は自転車に乗っていた/この子の画板が頭に当たった) のかな?

質問2: わざとかな? それともわざとじゃないのかな? ※ランダムな順に質問した。

わざとだと回答した場合は、わざとの程度を査定するため、3段階の円形カードから、一枚を選択させた。(敵意帰属得点: 3, 2, 1, 0点)

「最後に、おねえちゃんが玩具を持って来たから遊ぼう。この玩具の中で、自分が遊びたいものに、触らないで指で指して教えてね。」と教示し、3種類の玩具を呈示し、玩具を選択させた後「まずおねえちゃんがやってみるから、見て待っててね。」と教示して、調査者が実演して見せた。笛吹き風車、空気鉄砲を待っている時間の長さをそれぞれ測定した(衝動統制)。30秒間実演した。

### 反応的攻撃性についての調査

反応的攻撃性項目 (Brown, K., Atkins, M., Osborne, M. L. & Milnamow, M. 1996; Dodge & Coie, 1987; Marcus & Kramer, 2001) より、欲求阻止に対する怒り易さと防衛反応に関する項目を抜粋した質問紙を作成し、担任、副担任保育士にクラス全員の幼児について3段階評定 (よくある; 時々ある; ない, もしくはほとんどない) をしてもらった (付表2)。その結果を反応的攻撃性得点 (2, 1, 0点) とした。

### 発達検査

新版 K 式発達検査法より一部抜粋したものを (付表3)、敵意帰属についての実験と、衝動統制についての実験の間に、各児に実施した。

## 結 果

### 身体的攻撃的行動に影響を及ぼす要因について

被攻撃的行動、年齢、敵意帰属得点、衝動統制、各反応的攻撃性得点、反応的攻撃性得点、発達検査の各問題の得点が、攻撃的行動にどのように影響しているかを明らかにするために、上述の各項目を説明変数、攻撃的行動回数を従属変数とする重回帰分析を男女込み、男女別で行った (表1~3)。また、男児では、攻

撃的行動と被攻撃的行動の相関が高かった ( $r=.71$ ,  $p<.0001$ ) ため、説明変数から被攻撃的行動を除いた重回帰分析も行った。ただし、敵意帰属の実験課題で、男女各4名が「わからない」等の反応を示したた

表1 重回帰分析の結果（全幼児）

全 説 明 変 数			被攻撃的行動除く		
投入された変数	標準偏回帰係数	有意確率	投入された変数	標準偏回帰係数	有意確率
被攻撃的行動	.47	.00	S 2	.31	.00
S 4	.29	.00	S 4	.30	.00
S 2	.26	.00	衝動統制	-.28	.00
語彙数	-.21	.00	語彙数	-.22	.00
数唱	-.16	.00	数唱	-.20	.00
調整済み R <sup>2</sup>	.63		調整済み R <sup>2</sup>	.49	
除外された変数	投入された時の標準偏回帰係数	有意確率	除外された変数	投入された時の標準偏回帰係数	有意確率
左右弁別	-.13	.09	敵意帰属得点	-.12	.19
衝動統制	-.08	.35	S 5	.11	.29
敵意帰属得点	.08	.33	性別	-.04	.70
性別	-.07	.35	了解	.01	.88
図形模写	.03	.71	左右弁別	-.01	.92
了解	.03	.71	図形模写	-.01	.94
S 5	.02	.78			

※S 2. 「誰かに注意されたり、自分の思い通りにならない時に泣きわめいたり、怒ったりする」

S 4. 「けんかの時や誰かに注意された時に、相手のせいにする」

S 5. 「遊びやゲームで負けた時に、泣きわめいたり、怒ったりする」

表2 重回帰分析の結果（男児）

全 説 明 変 数			被攻撃的行動除く		
投入された変数	標準偏回帰係数	有意確率	投入された変数	標準偏回帰係数	有意確率
被攻撃的行動	.64	.00	S 4	.36	.00
S 4	.39	.00	敵意帰属得点	.41	.00
語彙数	-.27	.00	語彙数	-.47	.00
			衝動統制	-.28	.00
調整済み R <sup>2</sup>	.72		調整済み R <sup>2</sup>	.56	
除外された変数	投入された時の標準偏回帰係数	有意確率	除外された変数	投入された時の標準偏回帰係数	有意確率
敵意帰属得点	.19	.06	数唱	-.18	.12
数唱	-.15	.11	S 5	.17	.20
S 5	.12	.26	S 2	.09	.51
S 2	.10	.34	左右弁別	.06	.59
左右弁別	-.08	.39	図形模写	.04	.77
図形模写	-.03	.74	了解	.02	.87
衝動統制	-.02	.86			
了解	.003	.98			

※S 2. 「誰かに注意されたり、自分の思い通りにならない時に泣きわめいたり、怒ったりする」

S 4. 「けんかの時や誰かに注意された時に、相手のせいにする」

S 5. 「遊びやゲームで負けた時に、泣きわめいたり、怒ったりする」

表3 重回帰分析の結果 (女兒)

投入された変数	標準偏回帰係数	有意確率
S 2	.72	.00
調整済み R <sup>2</sup>	.50	
除外された変数	投入された時の標準偏回帰係数	有意確率
身体的被攻撃の行動	.22	.07
衝動統制	-.21	.09
S 4	.21	.10
左右弁別	.12	.32
語彙数	.14	.37
S 5	.09	.48
数唱	-.07	.56
敵意帰属得点	.03	.82
了解	.00	.10

※S 2. 「誰かに注意されたり, 自分の思い通りにならない時に泣きわめいたり, 怒ったりする」

S 4. 「けんかの時や誰かに注意された時に, 相手のせいにする」

S 5. 「遊びやゲームで負けた時に, 泣きわめいたり, 怒ったりする」

め, 分析から除いた。

以上より, 男女込みの結果から, 数唱, 語彙数での発達差が, 男児のみの結果から, 敵意帰属が, 攻撃的行動に影響を及ぼす要因として認められた。また, 男女込みと男児のみの結果から, 衝動統制も攻撃的行動に影響を及ぼす要因として認められた。反応的攻撃性項目は, 男児では「S 4. けんかの時や誰かに注意された時に, 相手のせいにする」が, 女兒では「S 2. 誰かに注意されたり, 自分の思い通りにならない時に泣きわめいたり, 怒ったりする」が, 攻撃的行動に影響を及ぼす要因として認められた。

#### 敵意帰属と衝動統制について

敵意帰属, 衝動統制, 反応的攻撃性の3要因が, 身体的攻撃的行動にどのように影響しているかを明らかにするために, 分散分析を行った。しかし, 3要因分散分析を行うと, 1人あるいは2人のセルがあったため, 今回はそれぞれの要因を組み合わせた分散分析を行った。

攻撃的行動回数を従属変数とした性別×敵意帰属(2: 高低)×衝動統制(2: 高低)の分散分析を行った。その結果, 衝動統制 ( $F(1,65)=11.01, p<.001$ ) の主効果が有意であった。

また, 敵意帰属得点, 衝動統制それぞれを中央値で

折半し, 高低に群分けし, 攻撃的行動回数を従属変数とした敵意帰属(2: 高低)×衝動統制(2: 高低)の分散分析を男女別に行った。その結果, 男児では, 敵意帰属の主効果 ( $F(1,34)=3.12, p<.09$ ) に有意な傾向が見られ, 衝動統制 ( $F(1,34)=12.65, p<.001$ ) の主効果が有意であった。女兒では, 衝動統制 ( $F(1,31)=11.37, p<.002$ ) の主効果が有意であった。

#### 敵意帰属と怒りについて

「S 2. 誰かに注意されたり, 自分の思い通りにならない時に, 泣きわめいたり, 怒ったりする」「S 4. ケンカの時や誰かに注意された時に相手のせいにする」「S 5. 遊びやゲームで負けた時に泣きわめいたり, 怒ったりする」の3項目に対する保育士の回答のうち, 「よくある」「時々ある」を反応的攻撃性有群, 「ない, もしくはほとんどない」を反応的攻撃性無群とした。

攻撃的行動回数を従属変数とした性別×敵意帰属(2: 高低)×反応的攻撃性(2: 有無)の分散分析を行った。その結果, 反応的攻撃性 ( $F(1,65)=13.38, p<.001$ ) の主効果が有意であった。

また, 攻撃的行動回数を従属変数とした敵意帰属(2: 高低)×反応的攻撃性(2: 有無)の分散分析を男女別に行った。その結果, 男女別分析の結果でも, 男女ともに反応的攻撃性の主効果 ( $F(1,34)=7.66, p<.04$ ;  $F(1,31)=9.70, p<.003$ ) が有意であった。

#### 衝動統制と怒りについて

攻撃的行動回数を従属変数とした性別×衝動統制(2: 高低)×反応的攻撃性(2: 有無)の分散分析を行った。その結果, 衝動統制 ( $F(1,73)=9.24, p<.003$ ) の主効果, 反応的攻撃性 ( $F(1,73)=8.53, p<.01$ ) の主効果が有意であった。

また, 攻撃的行動回数を従属変数とした衝動統制(2: 高低)×反応的攻撃性(2: 有無)の分散分析を男女別にそれぞれ行った。その結果, 男児では, 衝動統制の主効果 ( $F(1,38)=9.20, p<.004$ ) が有意で, 反応的攻撃性の主効果 ( $F(1,38)=2.81, p<.10$ ) と衝動統制と反応的攻撃性の交互作用 ( $F(1,38)=2.81, p<.06$ ) に有意な傾向が見られた。下位検定の結果, 衝動統制低群で, 反応的攻撃性無群よりも有群の方が ( $F=62.29, p<.01$ ), 有意に攻撃的行動回数が多かった。また, 反応的攻撃性有群で, 衝動統制高群よりも低群の方が ( $F=59.76, p<.01$ ), 有意に攻撃的行動回数が多かった (図1)。女兒では, 衝動統制 ( $F(1,35)=6.53, p<.02$ ) の主効果, 反応的攻撃性 ( $F(1,35)=$

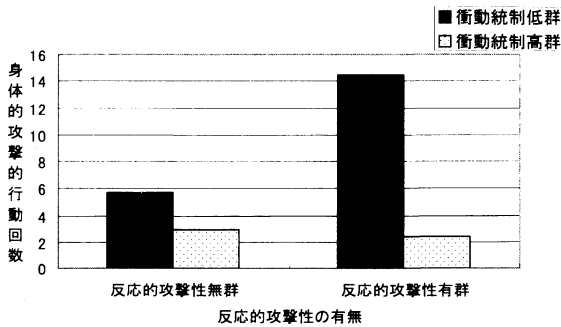


図1 身体的攻撃的行動回数における衝動統制と反応的攻撃性（男児）

9.20,  $p < .004$ ) の主効果が有意であった。

## 考 察

男女共に、衝動統制の低さ、欲求防止に対する怒り易さ・防衛的反応によって、攻撃的行動が生じることが認められた。Dodgeをはじめ、先行研究の対象児は学童期の子どもであり、攻撃的行動の要因は社会的情報処理モデルにあることが示されてきた。本研究では、対象児を幼児にしたところ、社会情報処理モデルにはない、衝動性や怒りの統制の低さが攻撃的行動の要因として示された。このことから、幼児期では、衝動性や怒りを統制することができない子どもが、解釈を行う前に、攻撃的行動を起こしている、つまり、大人が攻撃的だと考える行動は、衝動や怒りを統制することができない結果生じている行動だと考えられる。

子どもに関わる全ての大人（保育士や教師、保護者）が、子どもの攻撃的行動が、意図的であるのか、あるいは衝動的であるのかをまず吟味せねばならないだろう。なぜなら、意図的である場合と衝動的である場合では、それぞれ異なる働きかけが必要だからである。そして、大人は、どのような働きかけが適切かを考え、相談し、一貫した対応をすることが望まれるのではないだろうか。

### 男児について

衝動統制の低さと欲求防止に対する怒り易さ・防衛的反応の交互作用によって攻撃的行動が生じることが認められたことから、攻撃的行動が、衝動や怒りを統制できない結果生じている行動だと考えられる。一方、相手が自分に敵意を持っていると考える子どもは、そのように考えない子どもよりも、攻撃的行動が多い傾向があること、「けんかの時や誰かに注意された時に、相手のせいにする」という原因帰属が、攻撃

的行動に影響を及ぼしていることが認められた。

濱口（2002）は、学童期の攻撃児について研究する中で、「自分は仲間から嫌われている」というセルフ・スキーマ（過去経験を反映した一種の自己概念）によって、相手は自分に敵意を持っていると考えることを示唆している。本研究の結果と併せて考察すると、幼児期では、解釈することなく、衝動的・情動的に攻撃的行動を起こしている子どもが、自分の起こした攻撃的行動について、周囲の大人や友達から否定的な反応（怒られる、注意される等）を日々受けることで、けんかの時や誰かに注意された時に、自分の非を認めず相手のせいに行ったり、相手は自分に敵意があると考えたりするようになることが考えられる。また、攻撃的行動と被攻撃的行動の相関の高さ（ $r = .71$ ）から、攻撃的行動の多い子どもは、被害に合うことも多いため、相手は自分に敵意があると考えやすくなることも考えられる。このような経験を積み重ねることで学童期以降に、「自分は仲間から嫌われている」というセルフ・スキーマを持つようになることが予想できる。上記のようなセルフ・スキーマをいつ頃から抱くのかについて、今後検討することが必要だろう。

### 女児について

敵意帰属は攻撃的行動に影響を及ぼす要因であることは認められず、衝動統制の低さと「誰かに注意されたり、自分の思い通りにならない時に泣きわめいたり、怒ったりする」という欲求不満状況での怒り易さが挙げられた。

女児の身体的攻撃的行動回数は男児の約半数と少ないものの、衝動や怒りを統制できない結果生じている行動だと考えられた。八島（2002）は、女児は男児と比較すると、身体的攻撃が少なく、仲間はずれや無視をさせるといった仲間関係を操作する関係性攻撃（relational aggression）が多いことを示している。本研究での観察中、一人の子どもにだけ何かを見せないように仲間と言う、仲間はずれにしようと話し合うなどが観察されたが、観察者が側にいると中止することが多いため、多くを観察することはできなかった。このような関係性攻撃は、いじめといった問題につながるものが予想されるが、実体を捉えることが非常に困難であるため、研究方法に工夫が必要だろう。今後、関係性攻撃に影響を及ぼす要因を検討することが課題である。

### 攻撃的行動が見られる子どもへの介入

Lochman & Lenhart (1993) は、反応的攻撃の見られる子どもに社会スキル・トレーニングを行った。その中で、他者の情動理解を促すトレーニングよりも、他者の怒りの手がかりを正しく理解し、葛藤が生じた際の怒りを統制し、問題解決を図ることを促すトレーニングが有効であると述べている。Lochman ら (1993) の対象児は、小学生であるにも関わらず、情動理解よりも、怒りを統制するトレーニングが必要であることから、衝動性や怒りの統制が未熟な幼児には、尚更後者の働きかけが必要だろう。例えば、攻撃的行動を起こした子どもに「叩かれたらイヤだよ」「押したら痛いよ」等の声掛けするよりも、攻撃的行動を起こす直前や起こした直後に、「イライラした時は数を数えようね」「お友達を叩きそうになったら先生の手を叩きにおいでよ」等の声掛けをしたり、クールダウンするスペースを設け移動させたりといった、怒りを統制できるような働きかけが有効だと思われる。また、Sethi, A. Mischel, W., Aber, J. L., Shoda, Y. & Rodriguez, M. L (2000) は、1歳半で情動統制の低い子どもは、幼児期以降にも同様の傾向が見られること、養育者の対応によって、子どもの情動統制の低さが改善することを示している。養育者は、子どもの幼児期前半から情動統制の低さを把握し、早期から工夫した関わりをもつことで、情動統制を高めることができるだろう。どのような関わり方が有効であるかを検討することが、今後の課題である。

また、Dodge (1980) は、攻撃的行動と活動性の高さの関連性を指摘していることから、十分な活動ができていないために、ふとした場面で手が出ることも考えられる。各児の遊び方、運動量を検討することも必要だろう。

### 本研究の問題点

本研究は、フィールド観察を行うことで、より自然な幼児の攻撃的行動について検討することができた。しかし、衝動統制、怒り、発達検査の査定法について更に吟味が必要である。衝動統制は、報酬遅延課題を実施しただけであるため、他の課題や質問紙を用いることについて今後検討する必要がある。怒りは、反応的攻撃を査定する項目を抜粋し、保育士に調査を実施しただけである。Sethi et al. (2000) の研究から、幼児期前半での情動性の強さが、幼児期後半での怒りや衝動統制、ひいては攻撃的行動とどのような関係にあるのかを検討することが今後の課題となった。発達

検査は、新版 K 式発達検査の一部抜粋を使用しただけであるが、「数唱」「語彙数」の成績の低さが、攻撃的行動の要因として認められたことから、今後更に検討することが必要だろう。

### 要 約

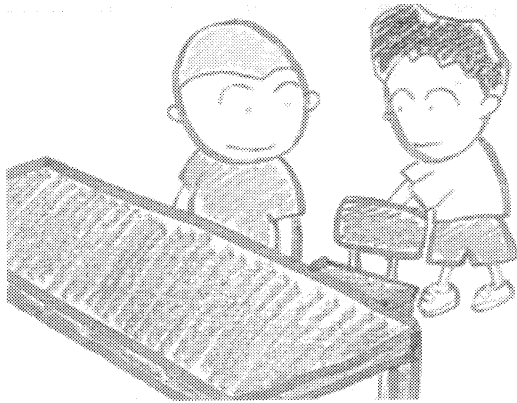
本研究の目的は、幼児の身体的攻撃的行動に影響を及ぼす要因について検討することとし、要因として、敵意帰属、衝動統制、怒りを挙げた。研究対象児は、保育園の年長児 81 名であり、保育園でのフィールド観察によって攻撃的行動の測定を行い、各児の敵意帰属、衝動統制、怒りをそれぞれ査定した。その結果、男女共に、衝動統制の低さ、欲求防止に対する怒り易さ・防衛的反応によって、攻撃的行動が生じることが認められた。また男児のみ、敵意帰属が攻撃的行動に影響を及ぼす傾向があることが認められた。このことから、大人が攻撃的だと考える行動は、衝動や怒りを統制できない結果生じている行動だと考えられる。

### 引用文献

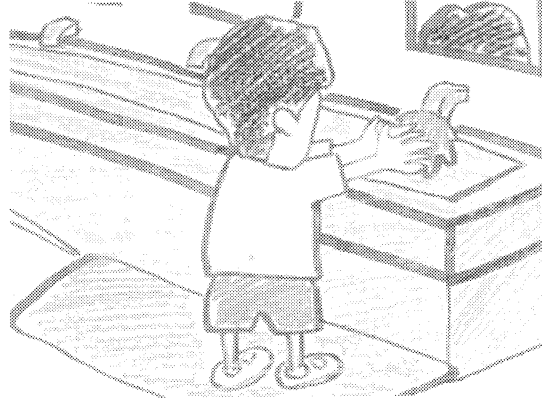
- Ayduk, O., Mendiza, D. R., Michel, W., Downey, G., Peake, P. K. & Rodriguez, M. 2000 Regulation the Interpersonal Self: Strategic Self-Regulation for Coping With Rejection Sensitivity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 776-792.
- Brown, K., Atkins, M., Osborne, M. L. & Milnamow, M. 1996 A Revised teacher rating scale for reactive and proactive aggression. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **24**, 473-480.
- Carlson, S. M. & Moses L. J. 2001 Individual Differences in Inhibitory Control and Children's Theory of Mind. *Child Development*, **72**, 1032-1053.
- Crick, N. R. & Dodge, K. A. 1996 Social information-processing mechanisms in Reactive and Proactive Aggression. *Child Development*, **67**, 993-1002.
- Dodge, K. A. 1980 Social cognition and children's aggressive behavior. *Child Development*, **51**, 162-170.
- Dodge, K. A. & Coie, J. D. 1987 Social information-processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer group. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 1146-1158.
- Dodge, K. A. & Somber, D. A. 1987 Hostile Attribution Biases among Aggressive Boys Are Exacerbated under Conditions of Threats to Self. *Child Development*, **58**, 213-224.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., Murphy, B., Maszk, P., Smith, M. & Karbon, M. 1995 The Role of Emotionality and Regulation in Children's Social Functioning: A Longitudinal Study. *Child Development*, **66**, 1360-1384.
- Gilliom, M., Shaw, D. S., Beck, J. E., Schonberg, M. A. &

- Lukon, J. L. 2002 Anger Regulation in Disadvantaged Preschool Boys: Strategies, Antecedents, and the Development of Self-Control. *Developmental Psychology*, **38**, 222-235.
- 濱口佳和 2002 第3章 攻撃性と情報処理 山崎勝之・島井哲志(編) 攻撃性の行動科学 ナカニシヤ出版 40-59
- 濱口佳和 2002 第41回 日本教育心理学会研究発表論文 日本教育心理学会 p. 496
- 片岡美菜子 1997 攻撃および非攻撃幼児の敵意帰属におよぼすムード操作の効果 教育心理学研究, **45**, 71-78.
- Kochanska, G., Murray, K., Jacques, T. Y., Koenig, A. L. & Vandegeest, K. A. 1996 Inhibitory Control in Young Children and Its Role in Emerging Internalization. *Child Development*, **67**, 490-507.
- Lochman, J. E. & Lenhart, L. A., 1993 Anger coping intervention for aggressive children: Conceptual models and outcome effects. *Clinical Psychology Review*, **13**, 785-805.
- Marcus, R. F. & Kraimer, C. 2001 Reactive and Proactive aggression: Attachment and social competence predictors. *Journal of Genetic Psychology*, **162**, 260-275.
- Quiggle, N. L., Garber, J., Panak, W. F. & Dodge, K. A. 1992 Social information processing in aggressive and depressed children. *Child Development*, **63**, 1305-1320.
- Schwartz, D., Dodge, K., Coie, J. D., & Hubbard, J. A. 1998 Social-cognitive and behavioral correlates of aggression and victimization in boys' play groups, *Journal of Genetic Psychology*, **26**, 431-440
- Sethi, A. Mischel, W., Aber, J. L., Shoda, Y. & Rodriguez, M. L. 2000 The Role of Strategic Attention Deployment in Development of Self-Regulation: Predicting Preschoolers' Delay of Gratification From Mother-Toddler Interactions. *Development Psychology*, **36**, 767-777.
- 八島美菜子 2002 第4章 攻撃性と発達 山崎勝之・島井哲志(編) 攻撃性の行動科学 ナカニシヤ出版 60-80
- Waldman, I. D. 1996 Aggressive boy's hostile perceptual and response biases: The role of attention and impulsivity. *Child Development*, **67**, 1015-1033.

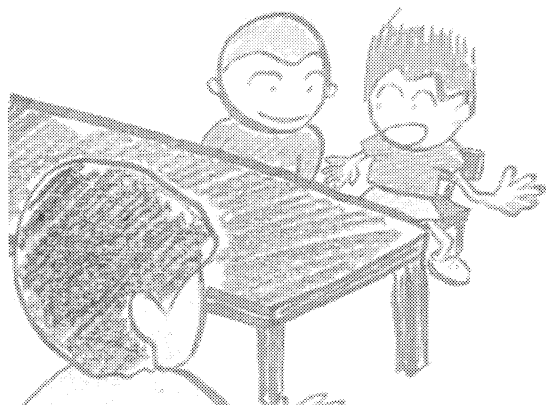
付録1 お昼ごはん場面・男児用  
(文字の部分は検査者が読んだ)



お昼ご飯のときに、「今日は好きところに座っていいですよ」と先生が言ったので、〇〇くんはここに椅子を置きました。



ご飯の前なので、〇〇くんは手を洗いに行きました。



手を洗って椅子の所に戻ってくると別のお友達が〇〇くんの椅子に座っていました。

付表1 紙芝居の内容

場 面	内 容
お昼ごはん	お昼ご飯の時に、「今日は好きなおところに座っていいですよ」と先生が言ったので、〇〇ちゃん（被調査児名）はここに椅子を置きました。ご飯の前なので、〇〇ちゃんは手を洗いに行きました。手を洗って椅子の所へ戻ってくると、別のお友達が〇〇ちゃんの椅子に座っていました。
自 転 車	自由時間に、〇〇ちゃんは自転車に乗って遊んでいました。先生が「お花に水を上げましょう」と言ったので、水をあげに行きました。水をあげて自転車の所へ戻ってくると、別のお友達が〇〇ちゃんの自転車に乗って遊んでいました。
画 板 （粘土板）	先生が、「絵を描く（粘土をする）ので画板（粘土板）を取りに行きましょう」と言ったので、〇〇ちゃんは画板（粘土板）を取りに行きました。すると、お友達の画板（粘土板）が〇〇ちゃんの頭に当たりました。

付表2 反応的攻撃性に関する質問項目

S2. 誰かに注意されたり、自分の思い通りにならない時に泣きわめいたり、怒ったりする
S4. けんかの時や誰かに注意された時に、相手のせいにする
S5. 遊びやゲームで負けた時に、泣きわめいたり、怒ったりする

付表3 発達検査の内容

問 題	内 容
図 形 模 写	十字・正方形・三角形・菱形の模写
数 唱	3数（例）5-8 （1）7-4-1 （2）9-6-8 （3）2-5-3 4数（1）4-7-3-9 （2）2-8-5-4 （3）7-2-6-1 5数（1）3-1-7-5-9 （2）5-2-4-7-3 （3）6-9-2-8-7
左右弁別	（1）あなたの左の手はどれですか （2）あなたの右の耳はどれですか （3）あなたの左の目はどれですか
了 解	I（1）お腹の空いたときには、どうしたらよいでしょうか （2）眠たいときには、どうしたらよいでしょうか （3）寒いときには、どうしたらよいでしょうか II（1）もしも、あなたが保育園へ出かける時に雨が降っていたら、あなたはどうしますか （2）もしも、あなたの家が火事で燃えているのをあなたが見つけたら、あなたはどうしますか （3）もしも、あなたがどこかへ行こうとして、バスに乗り遅れたら、あなたはどうしますか III（1）もしも、あなたが何か友達のものを壊したとき、あなたはどうしますか （2）もしも、あなたが保育園へ行く途中で、遅刻するかも知れないと気がついたときには、あなたはどうしますか （3）もしも、あなたのお友達がうっかりして、あなたの足をふんだときには、あなたはどうしますか
語 彙 数	動物・野菜または果物